

# 五姓各別と成佛不成佛の問題

保 坂 玉 泉

## 一 成佛不成佛思想の變遷

成佛不成佛の意義思想は一樣ならず、根本原始佛教時代から發達佛教を通じ現代に至る間各段の變遷發達があつた。

佛陀の語義は歴史的には釋尊が菩提樹下で正覺を成ぜられた時は自覺の義のみであつたが、鹿苑說法に五比丘を教化された時、茲に師弟關係が成立し新に覺他の義が加わり、佛陀には自覺覺他の二義を含むようになり、佛とは師の義教師の意を有することにいたり、佛十號中自覺の他に世間解、調御丈夫、天人師、世尊等覺他の義が加入せられるに至つた。

最初鹿苑で五比丘を濟度された時には、「世間有<sup>(1)</sup>六阿羅漢」と言い、次で長者子耶舍出家得道の時は、「世間有<sup>(2)</sup>七阿羅漢」と言い後耶舍の友數十人皈佛の時は「世間有<sup>(3)</sup>六十一阿羅漢」と言われた。是等數字の中いづれも一人は師佛陀を數えたもので、佛陀も師弟同一乘道の上からは阿羅漢（十號では第二位）であつた。然し弟子との關係上佛陀は師阿羅

漢であつて元より最上人無上士（阿耨多羅）であつた。故に師弟の情誼や禮儀から佛陀は最上敬愛の人格天にも地にも唯獨尊の存在であつた。而して根本佛教時代佛教發祥時代の佛陀は唯釋尊一人で、唯一佛思想であつた。從て此意味から成佛者は唯だ釋迦佛一人で、被敎所化の佛弟子等は皆不成佛者であつた。其師弟の信仰情操から當然釋迦佛は永遠に弟子等の本師であつて、從つて弟子は決して師とならない永遠に不成佛ということが正しき態度で、成佛など夢想だもしないところであつた。

此師弟情誼的一佛觀が哲學的に<sup>(2)</sup>一世界一佛の思想を形成した。佛陀は輪王から出世した、輪王は此娑婆世界唯一人であるから當然佛陀も一世界唯一人と考えられ、天に二日なく地に二輪王なきが如く一世界唯一佛なりという。次で<sup>(3)</sup>三世諸佛觀と十方諸佛觀が起つた。前者は時間久遠の思想と眞理無限の思想から、過去現在未來三世に涉つて多佛出現するという思想である。然し是等多佛は連續出現するが決して並起しな

いから、一世界同時唯一佛のみ存在する。過去毘婆尸佛の時には尸棄佛未だ出現せず乃至迦葉佛の時には釋迦佛未だ出世せず、釋迦佛存在時には未來彌勒佛出現せずというわけである。又後者十方佛の思想も世界無限、衆生煩惱無邊及び佛道眞理無量の思想から、それ等を救濟對處する佛又無限なるべく全十方世界には諸佛存在すべしとする。一見これは諸佛併存するが如くであるが、西方世界には彌陀一佛、東方世界には阿闍一佛、南方には寶生如來、娑婆世界には釋迦一佛という風に三千大千世界には三千佛も同時に存在するけれども依然として一世界一佛の線はずれない。従つて此三世十方佛の思想時代（三世佛思想は小乘時代、十方佛思想は大乗時代）は世界は一佛の化境であるという思想であるから成佛は師唯一人で其他弟子有情は依然として悉く不成佛者であつて未だ一切皆成佛思想には至らなかつた。

大小乘を貫く本生經の佛陀觀も尙お一佛思想であつた、即ち本生譚に現われた佛も菩薩も唯だ釋迦一佛釋迦一菩薩であつた。然し、この本生譚の成佛への因位の菩薩道とは六度の實踐によつて何人も成佛可能であり、然らざるものは假令四諦十二因縁の因行を積むとも唯だ阿羅漢になり無餘涅槃に入ることが出來ても成佛は不可能である。又人天有漏の因を修するも生天こそ出來るが成佛はおろか入涅槃さえ出來ないとし、因行の種類によつて成佛不成佛を差別することになり、

後の五姓各別説の基が形成されていた。従つて成佛可能のものも多くあるべきであるが亦不成佛者も多數あるわけで、未だ文字通り一切皆成佛思想には相當距離があつた。

而して此菩薩の行因を後に行佛性という。六度の教・行・智を内容とするもので又後の理佛性に相對する成佛因である。この行佛性を説くものは般若唯識等の三乘教の成佛觀である。行佛性に因る成佛信仰にありては行の行否に因りて成佛に能否あり、成佛不平等に墮し、一乘教の一切皆成佛平等説に反することになる。反之理佛性なるものは一切衆生悉有の本性であるから教・行・智の有無成否に拘らず平等に一切衆生皆共成佛道の因となる。これが法華涅槃華嚴天臺等の一乘教の成佛觀である。

此本具の理佛性は成佛の可能態として萬人平等に存在するも修せざるには顯われず證せざるには得ることなしで、佛性の任運に委しては天然の彌勒なしで成佛の期がない、理佛性だけでは直に一切皆成佛とはならぬことは言う迄もない。其處で頓悟漸修の成佛形態が對立した。後者は依然として教行に因つて成佛を待つもので打坐即心成佛、見性成佛、加持即身成佛、念佛往生等始覺門自力成佛の諸形態が之に屬する。前者頓悟成佛は専ら信證に由つて成佛するもので、信滿成佛、本證妙修、信心往生、唱題成佛など本覺思想による成佛の諸形態であつて、これは佛力や本願他力に依倚依頼するもので、

成佛とか往生とか本證妙修というは本佛本覺に皈一合一するものである。

以上根本佛教より現代佛教に至る成佛諸形態を概観したのであるが、この發達道程に於ける重要な段階、即ち從來の成佛思想を受容して更に現代の成佛思想を誘起し古代との關鎖連鎖の役割をなしたものは三乘五姓の種姓に因る成佛不成佛論であるから、吾人は之を本論文の主題としたのである。

- 1 五部律十五（大正藏二二・一〇五上）
- 2 長阿含第五尊經（大正藏一・三一上）中阿含四十七多界經（大正藏一・七二三下）
- 3 長阿含一大本經（大正藏一・一中）
- 4 大智度論四（大正藏二五・九三中）

## 二 成佛不成佛の因としての種姓異說

成佛不成佛の分れる主なる原因は種姓の差別に因る。概観すれば佛種姓・菩薩種姓あるものは成佛し、聲聞種姓・緣覺（獨覺）種姓のものは般涅槃し阿羅漢果に到るが成佛せず、前記三乘乃至四乗の種姓無き（之を無姓又は無姓有情という）ものは人天有漏の勝果を得るも阿羅漢にもなれず勿論成佛せずと斷ずる、故に成佛不成佛の判定をなすべく諸經論に依つて種姓の異說が擧げられている。

### (1) 四種姓說

五姓各別と成佛不成佛の問題（保坂）

「大般若經」第五百九十三卷に次の如き四種姓が説かれてゐる。

若有情類於<sup>(1)</sup>聲聞乘性決定者聞<sup>(2)</sup>此法已速能證得自無漏地……於<sup>(3)</sup>獨覺乘性決定者……於<sup>(4)</sup>無上乘性決定者……若有情類雖未<sup>(5)</sup>已入<sup>(6)</sup>正性離性而於<sup>(7)</sup>三乘性不定者……此四種姓の中前三者は定姓にして其證得も各別で菩薩種姓は佛果を成じ、聲緣二乘は阿羅漢果を成じ、不定姓は或は佛果或は阿羅漢果を成ずるのである。

次に「勝鬘經」攝受章に曰

又如<sup>(8)</sup>大地持<sup>(9)</sup>四重擔何等爲<sup>(10)</sup>四一者大海二者諸山三者草木四者衆生、如是攝<sup>(11)</sup>受正法……謂離<sup>(12)</sup>善知識無聞非法衆生以<sup>(13)</sup>人天善根成熟之<sup>(14)</sup>求<sup>(15)</sup>聲聞者授<sup>(16)</sup>聲聞乘<sup>(17)</sup>

求<sup>(18)</sup>緣覺者授<sup>(19)</sup>緣覺乘<sup>(20)</sup>求<sup>(21)</sup>大乘者授<sup>(22)</sup>大乘<sup>(23)</sup>

この大海・諸山・草木・衆生の四は大地が擔うものであるから四重擔といい、夫々菩薩乘・緣覺乘・聲聞乘・人天乘を配し佛陀の荷負せられるに譬えた。茲には不定姓を説かざるも人天乘を加えて四種姓となし、人天乘は布施等の世間道徳を實踐して人天有漏の勝果を得るも出世間的聲緣菩の教行を修せざるため無漏の佛阿羅漢果を得ないから之れを無姓有情という。斯く四乘四種姓を説いて成佛不成佛の差別を判じたのである。然し同經一乘章には

聲聞緣覺乘皆入<sup>(24)</sup>大乘<sup>(25)</sup>大乘者是佛乘<sup>(26)</sup>是故三乘即是一乘<sup>(27)</sup>

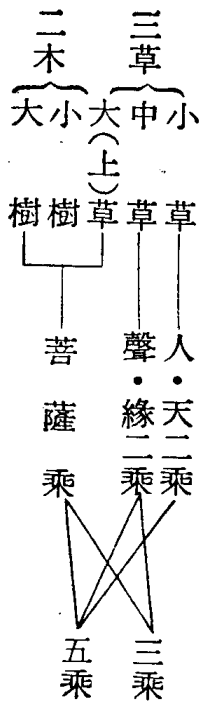
得<sub>二</sub>一乘<sub>一</sub>者得<sub>二</sub>阿耨多羅三藐三菩提<sub>一</sub> 阿耨多羅三藐三菩提者即是涅槃界 涅槃界者即是如來法身

というて、三乘即一乘、三乘皆共成佛道たること明かであるが、前文攝受章の人天乘無姓有情だけは不成佛と見ねばならぬ。従て一切衆生皆成佛とはならず成不成佛を差別視するとも言えるのである、未だ絶対平等觀には到り兼ねる。

(2)三種姓説

「法華經」には序品方便品を始め到處に聲緣菩薩の三乘及佛一乘を加えて總じて四乘四姓を説き、且つ三乘即一乘に皆皈せしむる、是れ法華の一乘主義一切皆成佛説である。又藥草喩品には三草二木の喩を以て

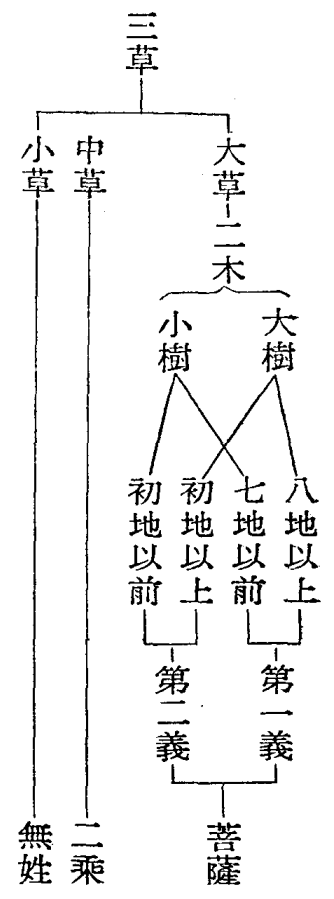
一切衆生聞<sub>二</sub>我法<sub>一</sub>者 隨<sub>二</sub>力所<sub>一</sub>受住<sub>二</sub>諸地<sub>一</sub> 或處<sub>二</sub>人天<sub>一</sub>轉輪聖王釋梵諸王<sub>一</sub> 是<sub>二</sub>小藥草<sub>一</sub> 知<sub>二</sub>無漏法<sub>一</sub> 能得<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub> 起<sub>二</sub>六神通<sub>一</sub> 及得<sub>二</sub>三明<sub>一</sub> 獨處<sub>二</sub>山林<sub>一</sub> 常行<sub>二</sub>禪定<sub>一</sub> 得<sub>二</sub>緣覺證<sub>一</sub> 是<sub>二</sub>中藥草<sub>一</sub> 求<sub>二</sub>世尊處我當<sub>一</sub> 作<sub>二</sub>佛<sub>一</sub> 行<sub>二</sub>精進定<sub>一</sub> 是<sub>二</sub>上藥草<sub>一</sub> 又諸佛子專<sub>二</sub>心佛道<sub>一</sub> 常行<sub>二</sub>慈悲<sub>一</sub> 自知<sub>二</sub>作佛<sub>一</sub> 決定無<sub>レ</sub>疑 是<sub>二</sub>名<sub>二</sub>小樹<sub>一</sub> 安<sub>二</sub>住神通<sub>一</sub> 轉<sub>二</sub>不退輪<sub>一</sub> 度<sub>二</sub>無量億百千衆生<sub>一</sub> 如<sub>レ</sub>是菩薩 名爲<sub>二</sub>大樹<sub>一</sub> といふ。之を圖示すれば如次



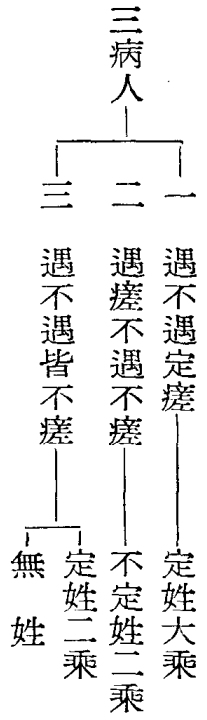
「法華」としては三草二木三乘五乘の差別を説くも、如來同一法雨の潤益、利益平等に普及し皆共成佛道の一乘教なることを主張する。(但し後に述ぶる如く三草二木と三乘五姓の配當に就ては諸家各解釋を異にし従て必ずしも悉皆成佛とは言わない)

「涅槃經」(北本)第十一卷現病品に三病人を説く、要を取つて之を言わば、三種病人あり、第一は瞻病醫藥を施すも施さざるも快癒せざるもの、これを遇不遇皆不瘥者として、聲緣菩薩三乘の説法に遇うも遇わざるも菩提心を發すべからざる無姓有情(本經は之を更に一謗大乘二五逆罪三一闡提の三種の無姓に分つ)。第二は瞻病醫藥を施せば癒い施さざれば治らざる病人、これを遇瘥不遇不瘥者として、佛菩薩より聞法すれば菩提心を發し聞法せざれば發心せざる聲聞緣覺の二乗の鈍根なるものに譬えた。第三は瞻病醫藥を施すも施さざるも無病健康體の人、これを遇不遇定瘥の者と名づけ、佛菩薩聲緣の聖醫から聞法するもせざるも自然に菩提心を發す菩薩利根者に譬えた。

法相宗祖親基はその「法華玄贊」に「法華」の三草二木の譬を次の如く乗姓に配釋している。



又「唯識論樞要」上末には「涅槃經」の三病人をば次の如く乘姓に配している。



「法華」「涅槃」は三草二木或は三病人の種姓を區別するも共に元より何れも一乘に皈し假令無姓でも悉皆成佛すとし、法相家では五姓各別説の立場からこれ等を解釋して成不成を判別する、その判別法は次下に至つて知られたい。

(3) 四種姓

「解深密經」卷二・無自性品には聲聞種姓・獨覺種姓及如來種姓の三乘を出だし更に一乘教は密意方便説なりとし三乘眞實なりと主張する。而して一向趣寂の聲聞と廻向菩提の聲聞とを説く、前者は定姓の聲聞なれば三乘中の聲聞種姓を指し、後者は不定姓(三乘不定姓)であるから、結局此品には聲

五姓各別と成佛不成佛の問題(保坂)

聞定姓・獨覺定姓・菩薩定姓及不定姓の四種姓を説き、此中菩薩定姓と不定姓の二人は成佛し、聲緣二乘は不成佛なりと判じ三乘差別を佛教の眞實説なりとする。尙同經卷四地波羅蜜多品にも三乘眞實一乘密意方便説を出だす、而して一乘説の根據は、三乘は同一法界同一理趣なりというにありとし、いわゆる理佛性による平等論、三乘の立場は行佛性による差別論なりとする後の佛性論の相違を暗示している。

「瑜伽論」に於ては卷二十一に六補特迦羅を、同卷六十七には無性有情を説き、卷第三十七には次の如く四補特迦羅を擧げた、

云何所成熟補特迦羅……略有四種一者住聲聞種姓……二者住獨覺種姓……三者住佛種姓於無上乘應可成熟……四者住無種姓於善趣應可成熟

とあり。此中、前三は三乘定姓の差別、住無種姓即ち無性有情は三乘の性こそなければ人天乘により人天の善趣に生住する、結局此四種に於てただ住佛種姓の補特迦羅のみ成佛可能なりとする。

(4) 五種姓

「涅槃經」(北本)第廿七卷(南本第廿五卷)獅子吼品に曰一切衆生悉有佛性。如來常住無有變易。法相家にては之を釋して、此處に一切というは全分の一切にして佛性とは理佛性であるから、此文をば聲緣菩の定姓と不

定姓と無性との五姓に通じて説かれた、従つて五姓皆成佛であるという。又、

<sup>(12)</sup>衆生亦爾 悉皆有<sub>レ</sub>心凡有<sub>レ</sub>心者 定當<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>阿耨多羅三藐三菩提<sub>一</sub> 以<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>故 我常宣<sub>レ</sub>説一切衆生悉有<sub>二</sub>佛性<sub>一</sub>

此處に一切衆生とは少分の一切にして佛性をば行佛性と解するから、従つて成佛するものは五姓中菩薩定姓と不定姓との二者のみとなり、其他は不成佛なりと判ずる。「涅槃經」自身としては一切衆生を少分全分に別ち佛性を理佛性行佛性に分けない、元より五姓平等に悉皆成佛するというを以て本意としてゐる。然るに「同學鈔」第三卷（一ノ三）には「無性所具眞理亦名<sub>二</sub>佛性<sub>一</sub>」といひ、同卷六十（九ノ二）には本性住種姓をば眞如の理なりとし、理佛性より見れば無姓有情も亦有佛性なりとし、行佛性より見れば無姓は無佛性なりとするから、前辯の如く涅槃經文を解することになる。即ち一乘家に對する三乘法相家の異見である。

次に「入楞伽經」卷二（四卷楞伽卷一、七卷楞伽卷二）に曰

<sup>(13)</sup>復次大慧 我説<sub>二</sub>五種乘證法<sub>一</sub>何等爲<sub>レ</sub>五一者聲聞乘性證法

二者辟支佛乘性證法 三者如來乘性證法 四者不定乘性證法 五者無性證法……（中略）……大慧何者無性乘 謂一闍提 大慧 一闍提者無涅槃性 何以故 於<sub>二</sub>解脫中<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>信心<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub> 大慧 一闍提者有<sub>二</sub>三種<sub>一</sub>何等爲<sub>レ</sub>二 一者焚<sub>二</sub>燒一切善根<sub>一</sub> 二者憐<sub>二</sub>愍一切衆生<sub>一</sub> 作<sub>二</sub>盡一切衆生

界願

とあり。

「同學鈔」第五十六卷（八ノ六）に

<sup>(14)</sup>依<sub>レ</sub>之（唯識義林）子島上綱依<sub>二</sub>此文<sub>一</sub>漸悟中有<sub>二</sub>悲增菩薩<sub>一</sub>云云……（中略）……廻向菩提聲聞中亦有<sub>二</sub>悲增一類<sub>一</sub>也

之に准ずれば大悲闍提亦通じて不定姓に有ること妨なき歟

次に「稱讚大乘功德經」に五姓を説く如次

<sup>(15)</sup>諸佛世尊……爲<sub>二</sub>有情類<sub>一</sub>説<sub>二</sub>五乘法<sub>一</sub>……以<sub>二</sub>一妙音<sub>一</sub>等澍<sub>二</sub>法雨一衆會無量有情……聲聞乘法……獨覺乘法……無上乘法……種々乘法……人天乘法

とあり、種々乘法とは不定姓、人天乘法とは無姓有情である。

「佛地論」卷二には左の五種姓を説く、

<sup>(16)</sup>無始時來一切有情有<sub>二</sub>五種性<sub>一</sub> 一聲聞種性 二獨覺種性 三如來種性 四不定種性 五無有出世功德種性

この中第五は無姓有情のことと前記「楞伽」の五種姓と全く同じ。

「大莊嚴論」卷一種性品にも<sup>(17)</sup>五姓を説く。今文意を取つて

之を述ぶれば、五姓とは一聲聞定姓、二緣覺定姓、三菩薩定姓、四不定姓、及五無姓とである。此中前四種姓は「玄贊」

<sup>(18)</sup>「樞要」に従えば「楞伽」の四種姓に同じという。然し無姓

の分類方は「莊嚴」は「楞伽」と異り、無姓を先ず時邊般涅槃法と畢竟無涅槃法との二つに分ち、前者を更に一、一向行

惡行 二、普斷諸白法 三、無有解脫分善根 四、善少（善不具足）の四種に細分し合して有性（暫時無性）とし後者畢竟無涅槃法（無因）を無性（畢竟無性）とした。尙「莊嚴論」には三乘差別の標準を界・信・行・果の四方面の差別に由つて定められるとした。

以上所述の中、「楞伽」「佛地論」「莊嚴論」は何れも法相系の諸經論であつて、元より五姓各別を認め成佛不成佛の差別を眞實なりとするものである。

#### (5) 聲聞姓異説

「法華論」下に四種聲聞を説く、嘉祥の「法華論疏」<sup>(21)</sup>下にも出す、四種聲聞とは、

- 一 決定聲聞 「法華玄贊」には趣寂の聲聞と名づく、
- 二 増上慢聲聞 凡夫が六行觀に依つて第四禪を得て阿羅漢なりと謂うもの、
- 三 退菩提心聲聞 譬喩品に「舍利弗、我昔汝をして佛道

に志願せしめしも汝今失忘して便ち自ら已に滅度を得たりと謂う」というもの

#### 四 應化聲聞 大菩薩及佛の化作せる聲聞富樓那等

此中第一は五姓の中の聲聞定姓、第二第三は不定姓の聲聞、第四は不定姓の菩薩に配せらる、従つて法相家にては第一をば不成佛、其他は成佛すると見る。

尙右「法華論」の四種聲聞の説はもと「瑜伽論」<sup>(22)</sup>第八十卷

より出たもので依然法相系統に屬する種姓論である。

「楞伽經」(四卷)第二卷一切佛語心品に云

大慧白佛言世尊 世尊三種阿羅漢 此說何等阿羅漢 世尊爲得寂靜一乘道 爲菩薩摩訶薩 方便示現阿羅漢 爲佛化作

又「楞伽」(十卷)第七入道品云

大慧 聲聞有三三種 言入八地寂滅門者 此是先修菩薩行者墮聲聞地 還依本心修菩薩行同入八地寂滅樂門 非増上慢寂滅聲聞云云

「瑜伽論」卷第八十云

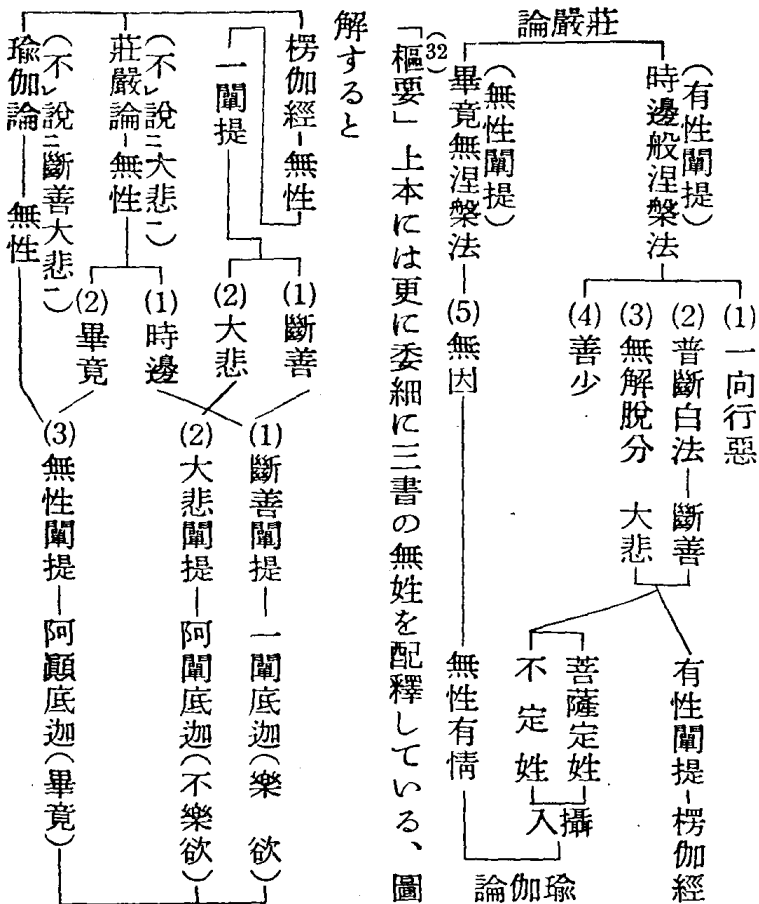
何名爲四種聲聞 一者變化聲聞 二者増上慢聲聞 三者回向菩提聲聞 四者一向趣寂聲聞

「本文抄」第二卷云「法華經中四種聲聞俱説之哉以否、」と、此答意を釋するに諸論異説あり「法華玄贊義決」<sup>(26)</sup>には二義を擧げた。第一義は、初の會座には四種俱に在り三止の後増上慢聲聞退席したから三種聲聞になつたという。第二義は、初時は趣寂を除いた他の三種俱に在つたが増上慢起後、退大・應化の二聲聞のみ残つたとし、此二義あるも取捨任意なりという。然るに「義林章」<sup>(27)</sup>一末諸乘章及び「慧日論」<sup>(28)</sup>卷四は前記「玄贊」の第二義を取つている。即ち「慧日論」は「法華經」第一卷の「増上慢比丘等」を増上慢聲聞とし、第二卷譬喩品の「我昔教汝(舍利弗)志願佛道汝今悉忘」を

退菩提心聲聞となし、第四卷の「富樓那」内秘菩薩行外現ニ是聲聞ニをば應化の聲聞としてゐる。要するに三種或は四種聲聞に於て趣寂と増上慢との聲聞は行智缺くるから不成佛なりと判ずる、従つて法相家からは法華と雖も行佛性を認むる以上一切皆成佛を主張することは出来ぬと言わんとするものである。

(6) 無姓異說

無姓有情に付て「莊嚴論」卷三「楞伽經」卷二「瑜伽論」卷第三十一・卷三十七の異說を相配して圖示する。



此中一闍底迦は生死を樂欲する義にして斷善闡提をいう、阿闍底迦は涅槃を樂欲せざる義にして大悲闡提のこと、阿闍底迦は畢竟の義にして畢竟無性のことである。諸經論に種々異說あるも合論すれば結局、斷善根闡提、大悲闡提、無性闡提、の三種に攝せられる。

- 1 大般若五九三(大正藏七・一〇六六上)
- 2 勝鬘經(大正藏一二・二一八上)
- 3 同上(同・二二〇下)
- 4 法華經藥草喻品(大正藏九・一九中)
- 5 涅槃經(北本)一一(大正藏一二・四三一中)
- 6 法華玄贊(大正藏三四・七八一上又七八二下)
- 7 樞要(大正藏四三・六一〇中六一二上)
- 8 解深密經二(大正藏一六・六九五上)
- 9 同上四(同・七〇八上)
- 10 瑜伽論三七(大正藏三〇・四九六下)
- 11 涅槃經(北本)二七(大正藏一二・七六七上)
- 12 同上(同)
- 13 入楞伽經二(大正藏一六・五二六下)
- 14 同學抄五六(大正藏六六・四九七上)
- 15 稱讚大乘功德經(大正藏一七・九一一中)
- 16 佛地論二(大正藏二六・二九八上)
- 17 大莊嚴論一(大正藏三一・五九四上)
- 18 法華玄贊一(大正藏三四・六五六下)
- 19 樞要上本(大正藏四三・六一二上)



- 20 法華論下 (大正藏二六・九上)
- 21 法華論疏下 (大正藏四〇・八一八下)
- 22 瑜伽論八〇 (大正藏三〇・七四四上)
- 23 楞伽 (四卷) 二 (大正藏一六・四九五中)
- 24 楞伽 (十卷) 七 (大正藏一六・五五五中)
- 25 瑜伽論八〇 (大正藏三〇・七四四上)
- 26 法華玄贊義決 (大正藏三四・八六九中)
- 27 義林章一末 (大正藏四五・二六六中)
- 28 慧日論四 (大正藏四五・四四二下)
- 29 莊嚴論三 (大正藏三一・五二六下)
- 30 入楞伽經二 (大正藏一六・五二六下)
- 31 瑜伽論二一 (大正藏三〇・四〇〇上)、  
同三七 (同・四四六下)
- 32 樞要上本 (大正藏四三・六一〇下)

### 三 五姓各別説と成佛不成佛の批判

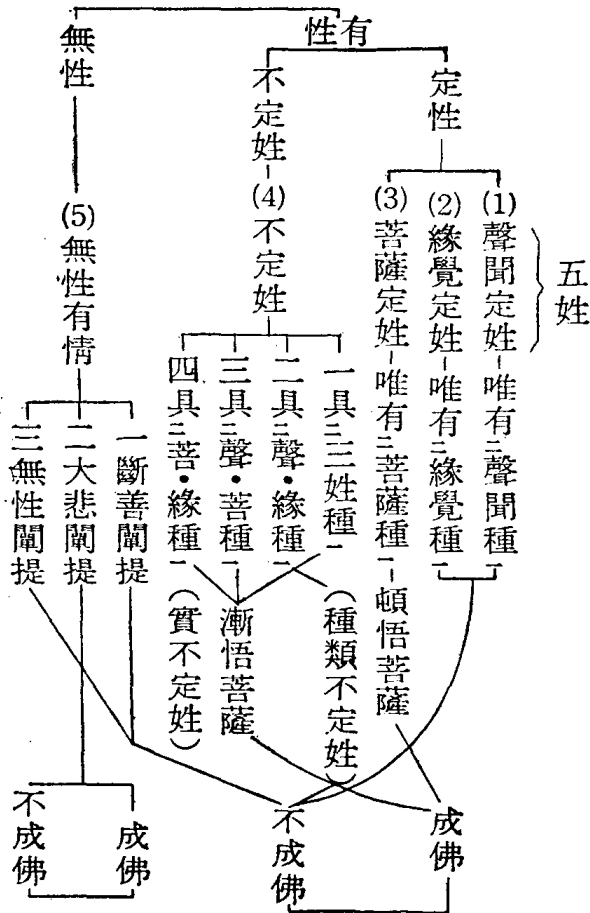
「成唯識論」卷二には五姓の差別の理由として新熏説の立場から無漏種子の有無に由らず瑜伽の説に従つて煩惱所知二障の種子の有無に依るとし、次で新舊合生説の立場から次の如く述べてゐる。

(1) 依障建立種姓別者 意顯無漏種子有無 謂若全無無漏種者 彼二障種永不可害 即立彼爲非涅槃性 若唯有二乘無漏種者 彼所知障種永不可害 一分立爲聲聞種

五姓各別と成佛不成佛の問題 (保坂)

姓二分立爲獨覺種姓 若亦有佛無漏種者 彼二障種俱可永害 即立爲如來種姓 即ち二障種子(新熏)と無漏種子(本有)との兩方に依りて五姓の差別ありとする。

尙「樞要」上本「義林章」一末「法華玄贊」卷一及卷四には諸經論の五乘五姓説を出している。これ元より法相宗疏であるから、前記「瑜伽」「唯識」の論説を繼承し五姓各別説を正義なりと判じ、成佛不成佛の差別を承認していることは勿論である。今、其總概圖を左に示す、



畢竟成佛可能のものは定姓頓悟の菩薩と不定姓漸悟の菩薩と無姓の中大悲闡提果上悟後應化の菩薩との三種にして其他は

不成佛なりとする。

成佛不成佛の根據は無漏佛種子の有無に由るとして「瑜伽論」には次の如くいうている。

問若非<sup>(5)</sup>習氣積集種子所<sup>レ</sup>生者何因緣故建<sup>レ</sup>立三種般涅槃法種姓差別<sup>(中略)</sup>何以故一切皆有<sup>レ</sup>眞如所緣緣<sup>(中略)</sup>故 答由<sup>レ</sup>有障無障差別<sup>(中略)</sup>故 若於<sup>レ</sup>通達眞如<sup>(中略)</sup>所緣緣中有<sup>レ</sup>畢竟障種子<sup>(中略)</sup>者 建立爲<sup>レ</sup>不般涅槃法種姓補特迦羅<sup>(中略)</sup> 若有<sup>レ</sup>畢竟所知障種子<sup>(中略)</sup>者 布<sup>レ</sup>在所依<sup>(中略)</sup>非<sup>レ</sup>煩惱種子<sup>(中略)</sup>者 於<sup>レ</sup>彼一分建<sup>レ</sup>立聲聞種姓補特迦羅<sup>(中略)</sup>云云

此中眞如所緣緣の種子の有無に依つて五姓の差別を建立し以て成佛不成佛を區別するのである。

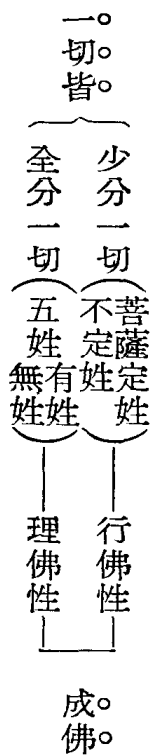
「佛地論」卷二には五姓を擧げて説明した後<sup>(6)</sup> 雖<sup>(6)</sup>餘經中宣<sup>(中略)</sup>說一切有情之類皆有<sup>レ</sup>佛性<sup>(中略)</sup>皆當<sup>レ</sup>作佛<sup>(中略)</sup>然就<sup>(中略)</sup>眞如法身佛性<sup>(中略)</sup>或就<sup>(中略)</sup>少分一切有情<sup>(中略)</sup>方便而說 爲<sup>レ</sup>令<sup>(中略)</sup>不定姓決定速趣<sup>(中略)</sup>無上正等菩提果<sup>(中略)</sup>故 由<sup>(中略)</sup>此道理<sup>(中略)</sup>諸佛利<sup>(中略)</sup>樂有情<sup>(中略)</sup>功德無<sup>(中略)</sup>有<sup>(中略)</sup>斷盡<sup>(中略)</sup>

といひ、「瑜伽」の眞如所緣緣をば眞如法身佛性としたがまだ此眞如を理とも智とも判然と區別するに至らず、故に一切衆生悉有佛性の義を解するに少分一切の義と見、五姓の中一分不定姓のみに有佛性を認めた。

然かるに「慧日論」には佛性に理佛性・行佛性の二を分ち理佛性から言えは眞如の理は一切衆生平等に悉有なれば一切

皆成佛可能なりとし（極言すれば草木國土も眞理を具有する故悉皆成佛するといふ）。然るに行佛性は眞如の智行であるから一切衆生に必有にあらず、従つて五姓の如く成佛不成佛の差別を認めねばならぬ。又一切有情を少分（或は一分）と全分とに制限し、不定姓の如きは五姓の全體からすれば一分成佛者となし、不定姓だけに就ていえば全分成佛者即ち一切皆成佛と判ずる。更に一乘家の意に従えば一切（五姓三乘）皆成佛と言ふは行佛性の無い無姓有情でも、理佛性を必ず本具するから全分一切衆生悉皆成佛すということが出来るが、行佛性から言わば彼宗と雖も五姓三乘成佛不成佛の差別を認めねばならぬと論評するのである。

故に「同學抄」卷十七（二ノ四）には前記「瑜伽論」の眞如所緣緣の種子を會通するに「唯識論」「慧日論」の文を引き、眞如所緣緣の種子とは無漏種子（行佛性・智）のことなりと評取し、その反面理佛性の存在をも認め暗に一乘三乘成佛不成佛論を批判せるが如くである。結局一切皆成佛の義をば法相家にては次の如く談するのである。



1 成唯識論二（大正藏三一・八中）

2 樞要上本（大正藏四三・六一〇）

- 3 義林章一末 (大正藏四五・二六六中)
- 4 法華玄贊一 (大正藏三四・六五六下)
- 同四 (同上・七一五上)
- 5 瑜伽論五三 (大正藏三〇・五八九上)
- 6 佛地論二 (大正藏二六・二九八上)
- 7 慧日論 (大正藏四五・四二〇中)
- 8 同學抄一七 (大正藏六六・一五九上)

#### 四 大悲闡提成佛不成佛論

五姓各別論でもはや残る問題は大悲闡提成佛不成佛論だけとなつた。大悲闡提とは有情化益の悲増の菩薩をいう。此菩薩は一切有情を化導成佛せしめざれば誓つて自ら成佛を取らずとの大願を發すものである。然るに有情盡くる時なき故永恒に成佛の期なしとする「同學抄」卷一(一ノ二)に「盡衆生界更無三圓滿期」故」といふものこれである。亦反之、既に本來菩薩種性であるから必ず成佛の期あるべしとする、之に三箇の理由を出す、(1)法爾種姓故、は「尋思抄」二・九丁の説で本來自然に菩薩種性を具有するが故に必ず成佛の期あるべしとす。(2)酬因感果故、は「尋思抄」二・十三丁及び「同學抄」卷一(一ノ二)との説で、佛種性の因ある菩薩には必ず成佛の果あるべきは因果必然の理であるという。(3)薰習増進故、は「尋思」「同學」二抄共に同じく前同處に出ずるところで、菩

五姓各別と成佛不成佛の問題 (保坂)

薩は本具の佛性が菩薩行によりて薰増進發するから遂に成佛するといふものである。

更に中容説としては菩薩行に悲智の二門を分ち悲増の故に不成佛、智増の故に成佛、即ち半成半不成折衷中容の義又無別類の義を建つるものもあつた。故に法相家に於ては大悲闡提に就て (1)成佛傳 (2)不成佛傳 (3)中容無別類義を建てるのである。

##### (1) 大悲闡提成佛傳

此傳の教證を次の如く列舉してみる、

「入楞伽經」卷二に云

無性謂一闡提 此有三一種一者(中略)二者憐愍一切衆生作盡一切衆生界願是菩薩也 若衆生不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>我亦不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>

「大智度論」卷三十に云

復次若有菩薩——(中略)——爲衆生故久住<sub>二</sub>生死<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>阿耨菩提<sub>一</sub>而度衆生——(中略)——如文殊師利毗摩羅詰觀世音大勢力遍吉祥等諸菩薩之旨

「不思議境界經」に云

觀自在等諸大菩薩 雖聞<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>更無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>進 如<sub>レ</sub>滿瓶水量置<sub>二</sub>於雨中<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>容 斯諸菩薩亦復如<sub>レ</sub>是「樞要」上本に云

以<sub>二</sub>衆生界無<sub>レ</sub>盡時<sub>一</sub>故大悲菩薩無<sub>二</sub>成佛期<sub>一</sub>

又同上に云

<sup>(9)</sup>楞伽大悲果必不成以衆生界無盡時

又同上に云

四句分別 一因成果不成謂大悲闡提

同上末に云

<sup>(10)</sup>有唯等流因非果變大悲菩薩之果無漏法爾種

「了義燈」四本に云

<sup>(11)</sup>唯除大悲盡生界願十地滿已可増進

一般に菩薩は第十地の滿つる時増進して成佛するが唯だ大悲

菩薩は衆生界を盡す願を果たすから之は除外例で不成佛であ

るとし大悲闡提のことを指している。

「慧日論」に云

<sup>(12)</sup>然許大悲菩薩並行加行因盡衆生界故常不作佛

此に加作因とは衆生救濟の行因をなすこと。この行因を果た

さざれば成佛の果に到らない、然るに衆生無邊なれば救度の

行因も無盡であつて永恒に作佛せずという。

<sup>(13)</sup>「同學抄」卷一（一ノ三）には撲揚大師は大悲菩薩は成佛無し

と判ずるとし「周記」の説として

大悲菩薩無成佛期

という。

尙、日本法相家でこの不成佛傳を唱うるものは「本文抄」<sup>(14)</sup>

に依れば南寺の護命、音石の明詮、清水の清範等なりとす、

曰、

明詮記亦存不成佛義。西復・清範同之

とあり、又曰

解節三云護命言楞伽所說至無成佛期者○恒住因位不

成果徳○

とある。

(2) 大悲闡提成佛傳

次に本傳の教證を又舉げる

「樞要」上本に云

<sup>(15)</sup>前二斷善久久當會成佛（註、會は必の意）

又云

瑜伽據理五姓類別（中略）大悲斷善則是第一（菩薩定姓）或

第四（不定姓）中

とあり。此意味は菩薩定姓不定姓の二は佛乘無漏の種子を具

する以上、佛種子現行して成佛の期なかるべからず、必ず成

佛すといわんとする。

尙、遡つて「成唯識論」卷十を見るに

<sup>(16)</sup>彼（不定姓）纔證得得餘涅槃決定迴心求無上覺云云

という確證があるから、不定姓の大悲菩薩も必ず成佛すと主

張する。大悲闡提は定姓菩薩か不定姓菩薩の範疇に屬し隨つ

て佛無漏種子の因を本具するから酬因感果修行成佛の理から

見て必ず成佛の期あるべしと論ずる。

「本文抄」卷二には成佛義を擧げた後

<sup>(17)</sup>慶順抄一同之 行賀・眞興同之 明詮記所引孝仁・平備

亦存成佛義因行滿故自然成佛

という。又「尋思抄」二に成佛傳の人師を擧げて云

良撰擬講被<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>一室上人傳也 濟恩寺僧都始立<sub>二</sub>不成

佛義<sub>二</sub>後改存<sub>二</sub>成佛義<sub>一</sub>鏡眞生界不成佛義歟 修學房以得<sub>二</sub>相

傳<sub>二</sub>皆成佛義也

法相家の間にも成佛不成佛の論争のあつたこと知るべきである。此兩傳を如何にするか、次の無別類義は兩傳を批判し調和の説をなすものである。

### (3) 大悲闡提無別類の義

日本法相宗に於ては前記成佛傳不成佛傳を折衷した半成佛半不成佛傳があつた、之を亦無別類義という、兩傳無差別という意味である。即ち菩薩行に悲智の二門を分ち、悲門に約して菩薩は不成佛なりとし、智門に約して成佛すとし兩方乖反せずという。「樞要義賓記」にいわく、

<sup>(18)</sup>大悲菩薩樂住<sub>二</sub>生死<sub>一</sub>○如<sub>二</sub>觀世音菩薩等<sub>一</sub>而言<sub>二</sub>當來普光功

徳山王佛<sub>二</sub>亦言<sub>二</sub>現在正法明如來等<sub>一</sub>者依<sub>二</sub>大智門<sub>一</sub>有<sub>二</sub>成佛

時<sub>二</sub>若據<sub>二</sub>大悲門<sub>一</sub>無<sub>二</sub>成佛期<sub>一</sub>衆生不<sub>レ</sub>盡故○下略

慶順抄一同之 行賀眞興同之云云

「尋思抄」卷二に成不成の理由を説く、云

成佛不成佛可有<sub>二</sub>二門<sub>一</sub> 若依<sub>二</sub>大智門<sub>一</sub>可<sub>二</sub>成佛<sub>一</sub> 依<sub>二</sub>上求

五姓各別と成佛不成佛の問題(保坂)

菩提之願行<sub>二</sub>因圓果滿是法爾道理菩薩種姓莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>熟故 若

依<sub>二</sub>大悲<sub>一</sub>不<sub>二</sub>成佛<sub>一</sub> 依<sub>二</sub>下化有情之願行<sub>一</sub>常住<sub>二</sub>因位<sub>一</sub>意樂未<sub>二</sub>

滿足<sub>二</sub>所作無<sub>二</sub>休息<sub>一</sub>云云

「法花私記」には大悲闡提菩薩無別類の義と有別類の義とを

出だして云

<sup>(19)</sup>古來諸徳之一切佛大悲邊云<sub>二</sub>大悲闡提菩薩<sub>一</sub>無<sub>二</sub>別大悲闡提<sub>一</sub>

也 忠繼大徳云有<sub>二</sub>別大悲闡提菩薩<sub>一</sub>也 問<sub>二</sub>傳中何勝 答

後爲<sub>レ</sub>勝(本文抄引)

というて有別類の義を取つてゐるが、「尋思抄」も右「法花私記」の文を引いた後

此義雖<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>忠繼<sub>一</sub>古來諸徳擧存<sub>二</sub>無別體義<sub>一</sub>旨明也

というて無別類義を取つて古來の諸徳の多數意見として決定し、尙云

所化千品示<sub>レ</sub>位不<sub>レ</sub>齊 彼觀音化身慈恩大師聖徳太子等 各

經<sub>二</sub>後位<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>至<sub>二</sub>成佛<sub>一</sub>也○後傳聞 大悲闡提者是果後方便

也 惠心僧都最後之案也

觀世音菩薩は既に成佛して正法明如來という佛果を成じ、更に大悲救世の爲方便應化身を示現せらるるとする。結局、菩薩は上求菩提の爲に成佛し下化衆生の爲に佛位に止らず、所謂生死に住せず涅槃に着せず活動的無住處涅槃に遊化するといわん。

結

前來の論述に依り、唯識修行成佛可能の正機は五姓の中定姓菩薩と不定姓と大悲闡提との三種姓に皈結した。即ち此三種を含めて菩薩種姓というのである。此中、定姓菩薩を頓悟の菩薩といい、不定姓菩薩を漸悟の菩薩という。頓悟の者を直往大乘人と稱し利根の大機とする、無始時來唯だ菩薩無漏種のみ本具するが故に二乗の行を経ずして直頓に菩薩道に入るからである。反之、漸悟の菩薩をば轉向大乘人と稱し鈍根の小機とする、無始以來並に三乘無漏種を具有し種姓不定にして二乗の行果を経て廻心して漸次菩薩行に入るからである。而して漸悟の菩薩は廻心の後、二乗時代の前加行の多少に隨ひ菩薩位に到る經劫に長短ありとす、即ち不定姓の聲聞の預流果のものは八萬劫、一來果のものは六萬劫、不還果のものは四萬劫、阿羅漢果のものは二萬劫、不定姓の獨覺は十千劫（一萬劫）を要すという（これは元涅槃經の説である）。斯く經劫して同じく菩薩資糧位に入るのである。畢竟、衆生の成佛不成佛の因由、就中菩薩成佛の遲速頓漸の差異は専ら種姓の差別に由る、換言すれば理佛性の有無に由るに非ずあくまで行佛性に由ると主張するのが法相一家の宗乘である。

- 1 同學抄一（大正藏六六・二七下以下）
- 2 尋思抄二・九丁

- 3 同・一三丁
- 4 同學抄一（大正藏六六・二八上以下）
- 5 入楞伽經二（大正藏一六・五二七中）
- 6 大智度論三〇（大正藏二五・二八三下）
- 7 不思議境界經（大正藏一〇・九一〇中）
- 8 樞要上本（大正藏四三・六一〇下）
- 9 同（同・六一一上）
- 10 同上末（同・六二九中）
- 11 了義燈四本（大正藏四三・七二九中）
- 12 惠日論一（大正藏四五・四〇九中）
- 13 同學抄一（大正藏六六・二九上）
- 14 本文抄二（大正藏六五・四一六上）
- 15 樞要上本（大正藏四三・六一一上）
- 16 成唯識論一〇（大正藏三一・五五下）
- 17 本文抄二（大正藏六五・四一六上）
- 18 同上
- 19 同上
- 20 北本大涅槃經一一（大正藏二二・四三二下）